

研究論文

古代中国語における〈死亡〉の社会的変異

—『史記』言語運用の研究—

彭 国躍 (神奈川大学)

古代中国社会は身分関係の厳しい封建社会である。このような身分関係は多かれ少なかれことばの運用に反映される。『礼記』(前1世紀)の中で、身分の異なる人の死についてそれぞれ異なる表現を使い分けるように規定している。本論文は『史記』(前1世紀)を対象として死亡を表すさまざまな異形と指示対象の社会的身分との関係、および言語変異に影響を与える他の社会的要因などについて考察した。そして、『礼記』の言語規範と『史記』の言語運用との間の違いについて検証を行なった。

キーワード: 言語運用, 言語規範, 社会的階層, 異形, 自由変異

The social variation of *Death* in ancient Chinese: An investigation of language use in *The General History of China*

Guoyue PENG (Kanagawa University)

Ancient Chinese society was a feudal society with a very rigid hierarchy, a factor which to a greater or lesser extent influences the use of the language. In *the book of rites* (one century BC), the author prescribes that different words should be used to express the death of people according to their positions in the social hierarchy. This paper investigates in *the general history of China* (one century BC) the relation between the various variants that express the meaning of death and the social status of the one referred to; in addition to other factors that cause the language variation. This paper verifies the differentiations between the language norms in *the book of rites* and the applications in *the general history of China*.

Key words: language usage, language norms, social hierarchy, variant, free variation

1. はじめに

『礼記・曲礼』には、「天子死曰崩、諸侯曰薨、大夫曰卒、士曰不禄、庶人曰死(天子の死去を崩と称し、諸侯には薨、大夫には卒、士には不禄、庶民には死と称する)」と記されている。この記述は、古代中国社会において指示対象の身分階級などの社会的関数によってさまざまな死の表現が使い分けられるという社会言語学的、語用論的現象として多くの研究に引用されている(王力1985: 148, 陳建民1989: 122, 顧曰国1992: 11, 沈錫倫1995: 65など)。しかし、倫理規範を示すことを目的とする『礼記』の性質を考えると、この記述をそのまま古代中国語

の運用事実として理解するにはまだ証拠不十分と言わざるをえない。『礼記』のこの記述がどの程度言語の運用事実を反映したかを知るためには、古代中国語の運用実態そのものを調べる必要がある。

古代中国語の運用実態について、その多くは音声言語として永遠に消え去ってしまったが、当時の口語体に近い文体で書かれた書記言語の資料を通して、その一部に光をあてることは可能である。われわれは今回『礼記』とほぼ同じ時代に成立した書物『史記』(漢王朝, 前1世紀)を検証の対象として選び、そのテキストにおける死に関する表現の運用実態を調べることにする。

『史記』は、漢武帝時代の史官(太史令, 中書令)

を勤めた司馬遷の手による中国最古の紀伝体歴史書であり、中国伝記文学の先駆でもある。ただし、それは後世のフィクションとしての歴史小説とは違い、先史の部分を含めて歴史上の人物や事件を史実という認識のもとで書かれたものである。そして、『史記』に使われたことばは、「雅言」という古代中国語の標準変種に属するが、擬古体が多く交ざる後の『漢書』などと比べれば明らかなように、そのスタイルがより口語体に近いものとなっている。このような意味で『史記』は『礼記』の記述を検証する恰好な言語資料だと言える。

『史記』は現在いくつもの版本が残っているが、本研究は、清朝金陵局本を底本とした中華書局本(1997)を調査の対象とする。『史記』は「本紀」「表」「書」「世家」「列伝」の5つの部門、あわせて130巻によって構成されている。『漢書』では当時においてすでに130巻のうち10巻の内容が散逸したと記されているが、その真相についてはまだ多くの謎に包まれ、具体的な散逸文章の個所についてもさまざまな議論が交わされ、その多くの説はまだ推測の域を出ない。したがって、今回の調査は全130巻の内容を対象とする。ただし、本文の末尾に綴られた「褚先生曰…」の内容は明らかに司馬遷の手によるものではないので、調査対象から除外した。

2. 用語の定義と作業仮説

社会言語学において、複数の形態を有しながら、同一の概念的、命題的意味機能を有する言語項目のことを「言語変項」(linguistic variable)と言い、同一の「言語変項」に属しながら異なる社会的コンテキストの中で使われたさまざまな形態のことを「異形」(variant)と言う。以下「人間の生命活動が停止する」という意味の言語項目を一つの「言語変項」として捉え、〈死亡〉で表し、具体的な文脈の中で使われたさまざまな形態をその異形とみなし、[崩]、[薨]などのように表す。

〈死亡〉の指示対象の身分階級などの社会的属性が異形選択に与えた影響について調べる前に、まず次のような作業仮説を立てる。

作業仮説：『史記』の言語運用において、『礼記』の規定通り、人が死亡することに関して、天子には[崩]、諸侯には[薨]、大夫には[卒]、士には[不禄]、庶民には[死]という異形がそれぞれ使い分けられる。

これから、この仮説が成立するかどうか、『史記』の運用実態と『礼記』の運用規範との間に相違があるかないか、あるとしたらどの程度あるのか、身分階級以外にどんな要因が異形選択に関与したのかなどについて検証していく。検証のプロセスは、まず『史記』に現れた〈死亡〉のすべての異形とその延べ出現数を調べ、各異形の形態的、意味的特徴を分析する。そして、古代中国社会の身分制度について概説し、その基本的な身分構造を提示する。さらに、全体像から具体的な文脈条件へと議論の焦点をしばり、各異形が使われた人数と人物およびその死亡年を特定しながら、その運用にかかわったさまざまな社会的要因などについて考察する。

3. 異形の形態と意味の分析

3.1 形態

『史記』の中に、「知死必勇」、「漢馬死者十余萬」などのように不特定人物や動物の死に関する表現が多く含まれているが、ここではこのような表現を考察の対象から外し、特定の人間の死について言及した表現にだけ限定する。そして、古代中国語の文字使用においては、その表記上の特性により、同音異字、同義異字、または同音同義の語に対してその微妙なニュアンスによってあるいは単なる一時的な借用(通假)によって異なる文字形態を使う現象がある。その場合、音声と意味だけを考えると1つの語と認めるべきものが、異なる字形によって2通り以上に表記されることになる。たとえば、『史記』の中の[没]と[歿]、[物]と[刳]はそれぞれ音声言語においては同一語とされるものである。ここでは書記テキストの表記にしたがい、いずれも表記上の異形の一種として併記する。『史記』の原本が残っていないので、こういった表記の違いは本来そうだったのか、写本の段階で生じた現象なのかは不明であ

る)。

まず、『史記』に現れた〈死亡〉のすべての異形を抽出する。

〈死亡〉：[卒／死／崩／薨／亡／終／没／故／夭／歿／喪／債／隕／實／殊／百歳／没世／物故／寿終／千秋／万歳／没齒／圻身／万世／棄捐／下席／棄群臣／填溝壑／天年終／捐館舍／捐賓客／山陵崩／不立朝／宮車晏駕／千秋万歳／登仙于天／天年下世／天崩地坼]

この語形調査により次のような事実が判明した。

①『史記』の中で、言語変項〈死亡〉に対して、全部で38種類の異形が使われ、その種類は『礼記』の記述(5種類)よりはるかに多い。

②〈死亡〉の異形には、1字語や2字語のような語彙レベルの表現だけでなく、[棄群臣](臣下たちをすてる)、「不立朝」(朝政を休む)などのような句表現も多く含まれている。

③『礼記』の中で「士」の身分に使うとされる異形[不禄]は、『史記』にはまったく現れていない。ここで『史記』において「士」という身分にあたる者に対して、いったいどんな異形が使われたかという疑問が生じた。この問題については5.4で検証する。

『史記』は多くの史実に関して周王朝時代の古い文献に基づいたと言われている(韓兆琦1996、宮崎市定1996)。『史記』の記述とその根拠となる文献の1つ『左伝』の記述を照らし合わせると、一部の基本的な事実については宮崎(1996: 88)が言う

ように「それ(『左伝』)を『史記』が踏襲している」と言えるかもしれないが、言語運用レベルにおいてはけっして『左伝』のことは『史記』がそのまま写したわけではないようである。たとえば、春秋時代の晋国の毒殺事件について、『左伝』では「…与犬、犬斃、与小臣、小臣亦斃」(…犬に与えたら犬が死に、お使いの小臣に与えたら小臣も死んだ)と記しているが、『史記』では「…与犬、犬死、与小臣、小臣死」(『第39巻 晋世家』)となっている。[斃]は以上の語形調査で『史記』にはまったく使われていないことが分かったので、ここで司馬遷は史実として『左伝』の記述を参考にしても、語彙選択においては自分自身の言語習慣にしたがい、自分の使用語彙のレパートリーに基づいて書き直したことがはっきり分かる。この意味において、38の〈死亡〉異形は司馬遷自身の使用言語として信用することに問題はないだろう。

次に38の異形の文字数(音節数)によって4つのグループに分け、それぞれの延べ使用数を調べる。

表1の調査で、[卒、死、薨、崩]が38の異形の中で、使用頻度が圧倒的に高い表現であることが分かる。使用率がもっとも高いこの4つの異形が全部『礼記』の記述に含まれたので、『礼記』は、[不禄]の疑問をのぞけば、〈死亡〉のさまざまな異形の中でもっとも代表的な表現を規範として定めたことが明らかである。

3.2 意味的特徴

38の異形に現れたもっとも顕著な意味的特徴は、[死]以外の異形がすべて多義的な表現で、その「死ぬ」という意味は本来の一次的な意味から派生

表1 異形の延べ使用数

一字 延べ使用数	卒	死	薨	崩	終	没	亡	故	夭	歿	喪	債	隕	實	殊
	1107	1011	315	234	10	10	7	2	3	1	1	1	1	1	1
二字 延べ使用数	百歳	没世	物故	寿終	万歳	千秋	没齒	圻身	万世	棄捐	下席				
	5	3	2	2	2	1	1	1	1	1	1				
三字 延べ使用数	棄群臣	填溝壑	天年終	捐館舍	捐賓客	山陵崩	不立朝								
	2	2	2	2	1	1	1								
四字 延べ使用数	宮車晏駕	千秋万歳	登仙于天	天年下世	天崩地坼										
	6	1	1	1	1										

された2次的な意味または含意に属するというものである。たとえば、[崩]はその基本的な意味として「(山が)崩れる」ことを表す動詞で、『史記』に「梁山崩」などの記述があるように、当時その1次的な意味としても使われていた。このことから〈死亡〉の異形としての[崩]は、「山が崩れる」というメタファーによって形成した派生的意味であることが容易に想像できる。そして、[棄群臣]、[不立朝]などのような句表現も一種のメタファーで、文字通りにはあくまでも「臣下をすてる」、「朝政を休む」という意味で、「死ぬ」という意味はその2次の含意に属するものである。

個々の異形表現には、「死ぬ」という意味以外に次のような多義の特徴が見られる。

①崩れる：[崩，山陵崩]は山が崩れることを，[薨]は山が崩れる場合のような大きな音を，[天崩地坼]は天が崩れ地が裂け落ちることを，それぞれ1次的な意味として表している。いずれもとんだ災難が起きることから「死」に転意したと思われる。

②落ちる：[隕，貫，墜]などは、1次的には星などが空から落ちることを意味するが、天上の星が地上の人間の魂と対応し、星が1つ落ちると地上に人間が1人死ぬという民間信仰から死を意味するようになったと思われる。

③折れる、中断する：[夭，殊]はある状態が途中で中断する意味から死に転意した。

④無くなる、消える：[没，没（齒），歿，故，喪，亡，物故，圻身]などは、無くなる、消える、逃げるなどいずれも視界から遠ざかり見えなくなるという意味から「死」に転意したものである。

⑤終わる：[卒，終，寿終，天年終]などはある出来事や期間が終了する意味から「死」に転意した。

⑥長生きする：[百歳，千秋，万歳，万世，千秋万歳]などは文字通りには長くまたは永遠に生き続けることを意味するが、①～⑤が「死」という生命活動が停止する現象を空間と時間の現象を通して捉えているのに対して、⑥は死を生を持続現象として捉えている。このように表現することは[死]が持つマイナスの意味を和らげる効果を持っている。

⑦生きた人間の行為：[棄捐（すてる），下席

（皇帝が退席する），不立朝（朝政を休む），棄群臣（臣下たちをすてる），捐館舍（官舎をすてる），捐賓客（賓客をすてる），宮車晏駕（御車が遅れる）]などは、いずれも生きた人間の意志による行為として表現している。これらの表現は、ただ消極的に[死]という表現を避けるのではなく、あたかもその人がまだ生きているかのように表現している。このように表現するのは〈死亡〉という命題の意味を伝えと同時に、最大限に不吉な出来事への連想を避け、死のマイナスイメージを極力軽減する効果がある。

⑧神となる：[登仙于天]は神となって天に昇ることを意味し、神仙思想がはやる漢武帝時代の世相、宗教観を反映している。

⑨土となる：[填溝壑]（溝を埋める）は、死者を、溝を埋める土にたとえ、価値のないもののように表現している。38の異形中唯一マイナスの価値含意を持つ謙讓表現である。

4. 社会的階層の分析

『史記』は、先史の五帝時代から漢王朝の武帝時代（紀元前2世紀頃）までの約3千年の歴史を綴ったものである。その間に夏（前21世紀～前16世紀）、商（殷，前16世紀～前1066）、西周（前1066～前771）、東周（春秋戦国，前770～前221）、秦（前221～前206）などの時代が移り変わっている。古代中国の社会構造や官職制度、官職名は各時代によって大きく変化したため、『史記』に現れたさまざまな人物の身分も、正確にはそれぞれの時代や国の身分制度の中で相対的に判断しなければならない。しかし、各時代や地域の身分の対応関係を見るためには統一した基本的枠組みが必要である。『礼記』では、古代中国社会の身分階級を特定の地域や時代を超えて基本的に「天子、諸侯、大夫、士、庶人」の5つのクラスに区分されている。ここでは、古代中国社会における基本的な身分構造に着目し、特定の時代や地域による官職名の変化にとらわれず、〈死亡〉のさまざまな異形が使われた者の身分階級について、「皇帝層、皇族層、諸侯王層、王族層、

大臣層、仕官層、庶民層」の7つの層に分けて整理する。「皇族層」と「王族層」以外は基本的に『礼記』の5つの階層に相当するが、「皇族層」と「王族層」を設けたのは、『史記』の中で〈死亡〉の異形が使われた者に5つの階層に簡単に納まらない皇帝の親族や諸侯王の親族が多く含まれたためである。以下各階層の定義と内容について説明する。

皇帝層：古代中国の歴代最高支配者を指す。『史記』では最高支配者に対して、先史時代や夏商時代には「帝」、周王朝では「(周)王、天子」、秦、漢王朝では「皇帝、皇、天子」などと時代によって異なる呼び方をしているが、ここでは、漢王朝までの歴代最高支配者をまとめて「皇帝層」とする。

皇族層：歴代最高支配者(帝、天子、皇帝など)の配偶者や直系親族を指す。皇族でありながら他の官職についている者は〈死亡〉の異形が使われた時の記述内容にしたがう。

諸侯王層：皇帝層以外に、それぞれ国土と臣民を持つ王の身分の者を指す。これらの人々に対して時代や地域によって「公、王、国君、諸侯王、單于(匈奴王)」などさまざまな呼び方があるが、ここではこれらをまとめて「諸侯王層」と呼ぶ。そして、「諸侯王層」の時代による内訳として、夏商までは「族首」、(西・東)周王朝は「国君」、秦・漢朝は「諸侯王」とそれぞれ区別して記す。(秦は諸侯を封じる制度をやめたので事実上はなかった。)

王族層：諸侯王層の配偶者や直系親族を指す。皇族層と同様、王族でありながら他の官職についていた人は〈死亡〉の異形が使われた時の記述内容にしたがう。

大臣層：「卿、大夫、相、丞相、御史大夫、相国、宰相」など皇帝や諸侯王を補佐する大臣クラスの上層官僚や「驃騎大將軍」などのような上級將軍、そして漢王朝から「侯」の爵位を授けられた者を指す。「大臣層」の中で皇帝層に仕える者と諸侯王層に仕える者との間に身分差が見られるが、諸侯王層に仕える者の大半は周王朝各国の大臣で、皇帝層に仕える者の大半は秦・漢時代の大臣で、それぞれ単純に上下関係をつけることができないので、ここでは「大臣層」として1つにまとめた。

仕官層：中下層官吏、一般貴族、学者文人を指す。学者文人をこの層に入れたのは、古代中国社会において学者文人は事実上何らかな文官職についたケースが多いからである。

庶民層：医師、道士、遊俠、勇士、芸人など上の階層に入らない人々を指す。

5. 異形の社会的階層分布

以下、〈死亡〉の各異形が使われた対象者の人数とその社会的分布状況について調べる。各異形の延べ使用数ではなく、対象者の人数を調べるのは、対象人物が話題に登場する回数による偶然性を排除し、各異形と社会的身分の関係をクローズアップすることができるためである。つまりこの調査では、同一の異形が同一人物に2回以上使われても「1人」と計算し、1人の人物に対して2つ以上の異形が使われた場合には、各異形のところでそれぞれ1人と計算する。たとえば、秦の始皇帝に対して「崩」が延べ13回、「死」が2回、「没」が1回それぞれ使われたが、「崩」「死」「没」の「皇帝層」にそれぞれ1人と計算する。

ここでは『史記』の中で延べ使用数が3桁以上現れ、『礼記』にも記述された4つの異形「崩、薨、卒、死」を中心に各異形の社会的階層の分布状況について調べる。

5.1 「崩」

『史記』における「崩」の使用対象は、表2が示すように89人中83人(93.3%)が皇帝層に集中している。この調査により、『礼記』の「天子曰崩」という記述内容は『史記』における「崩」の運用実態とほぼ一致していることが分かる。そして同時に、この調査で「崩」が皇帝層以外の人物に対しても使われたという6.7%の例外現象の存在も確認された。この例外現象の具体的な条件を見るために、「崩」が使われたすべての人物リストを提示する。

表3のリストで、「崩」が使われた「皇帝層」(帝、周王、皇帝)以外の人物は、すべて秦と漢の時代、しかも皇帝の父母(太上皇、皇太后)に限られ、時

表2 「崩」の社会的階層分布

計	皇帝層			皇族層		諸侯層	王族層	大臣層	仕官層	庶民層
89人	83 (93.3%)			6 (6.7%)		0	0	0	0	0
内訳	帝	周王	皇帝	皇太后	太上皇					
	47	29	7	5	1					

表3 「崩」の使用対象

先史 ～ 商	帝 (47人)	黄帝, 瑞珣, 帝告, 尧, 舜, 禹, 啓, 太康, 中康, 相, 少康, 予, 槐, 芒, 泄, 不降, 扃, 厘, 孔甲, 皋, 發, 湯, 外丙, 中壬, 太宗, 沃丁, 小甲, 雍己, 中宗, 仲丁, 外壬, 河宣甲, 祖乙, 祖辛, 沃甲, 南庚, 陽甲, 盤庚, 小辛, 小乙, 武丁, 祖庚, 甲, 廩辛, 庚丁, 太丁, 乙
西周 ～ 東周	周王 (29人)	文王, 武王, 成王, 穆王, 共王, 懿王, 孝王, 夷王, 宣王, 平王, 桓王, 庄王, 釐王, 惠王, 襄王, 頃王, 匡王, 定王, 簡王, 靈王, 景王, 敬王, 元王, 考王, 威烈王, 安王, 烈王, 顯王, 慎靚王
秦 ～ 漢	皇帝 (7人)	秦始皇帝, 漢高祖, 孝惠帝, 孝文帝, 孝景帝, 孝武帝, 孝昭帝
	皇太后 (5人)	秦始皇帝母太后, 漢呂太后, 漢竇太后, 漢薄太后, 漢王太后
	太上皇 (1人)	漢高祖太上皇

代や親族関係においてははっきり限定されていることが分かる。そして、漢高祖太上皇、秦始皇帝母太后のような初代皇帝の父母も息子が皇帝になってから亡くなった場合には「崩」が使われるという事実が判明した。後ほどにも触れるように、秦始皇帝の父にあたる秦莊襄王は息子が皇帝になる前に亡くなったので「崩」は適用されなかった。

5.2 「薨」

「薨」の階層分布(表4)を見ると、その使用対象は「諸侯王層」を中心に、「皇族層」から「大臣層」までの間に分布し、「皇帝層」と「仕官層」、「庶民層」に対してはまったく使われていないことが分かる。「薨」の使用対象148人中、91人(61.5%)が「諸侯王層」に属することや、「仕官層」以下に使われないことから、その使用領域は「崩」ほど明確ではないが、皇帝に次ぐ高い身分の者に対して使うという意味で、『礼記』における「薨」の位置づけをある程度反映していると言える。

「薨」が使われた対象者(148人)の中で周朝時代の人物は14カ国(宋, 齊, 晋, 鄭, 魯, 秦, 蔡, 楚, 曹, 衛, 陳, 燕, 呉, 魏)中の46人の国君と

1人の大臣(燕国の相)で、それ以外はすべて秦・漢時代の人物である。「薨」の指示対象には周朝以後の人物にかたよるという時代的特徴が見られる。この特徴は後の「卒」と比較すると一層ははっきりしてくる。

5.3 「卒」

『礼記』では「大夫曰卒」と記しているが、表5の調査では、「卒」はむしろ「諸侯王層」(73.8%)にもっとも集中的に分布している。「卒」は、同じ「諸侯王層」を中心に分布している「薨」と使用領域が大きく重なり、両者の間に『礼記』が記述したようなはっきりした身分差は見られない。表4で「薨」が「仕官層」以下の身分にまったく使われていないのに対して、表5では「卒」が「仕官層」以下の者にも使われている。この意味において、「薨」が「卒」より身分の高い人に使うという『礼記』の位置づけに肯けなくもないが、「卒」の運用全体から見ると、その使用対象の社会的身分において「皇族層」から「庶民層」まで幅広く分布し、時代的にも先史(族首)から漢王朝までをカバーし、〈死亡〉異形の中で丁寧な表現として一般化する傾向が見ら

表 4 「薨」の社会的階層分布

計	皇帝層	皇族層			諸侯王層		王族層		大臣層		仕官層	庶民層
148 人	0	3 (2%)			91 (61.5%)		9 (6.1%)		45 (30.4%)		0	0
内訳		皇太后	皇太子	公主	国君	諸侯王	王太后	王子	侯	相卿		
		1	1	1	46	45	4	5	43	2		

表 5 「卒」の社会的階層分布

計	皇帝層	皇族層			諸侯王層		王族層			大臣層			仕官層		庶民層				
600 人	0	8 (1.3%)			443 (73.8%)		13 (2.2%)			122 (20.3%)			12 (2%)		2 (0.3%)				
内訳		皇后	妃	皇太子	族首	国君	諸侯王	太后	王后妃	太公子	親王	侯	相卿	大夫	將軍	官吏	学者	俳優	道士
		1	3	4	28	369	46	1	7	3	2	27	67	17	11	8	4	1	1

れる。

「卒」が丁寧な表現として一般化する傾向について、具体的なケースとして孔子の死への言及を調べてみる。孔子は、52 才の時に一時期魯国の官職（委吏、乗田）に勤めた以外は、74 才で亡くなるまで、ほとんど学者として古籍整理や教育、遊説に生涯を費やした。その孔子の死について『史記』では 18 回言及したが、そのうち「卒」が 15 回、「没」が 2 回、「死」が 1 回それぞれ使われた。司馬遷は『第 47 卷 孔子世家』の中で孔子の出身について「布衣」（平民）と称した。宮崎（1996：38）も指摘したように、一介の平民出身の学者が『史記』の「世家」編の中で諸侯王や歴代名相などと肩を並べるのは破格の扱いである。司馬遷は『第 130 卷 太史公自序』の中で孔子を称え、周公と並んで 500 年に 1 人しか出ないほどの「至聖」として敬意を表したが、このような人物の死についておにも「卒」が使われたということは、「卒」が「崩」と「薨」に比べて身分制約がゆるく、高く評価する人物を、その身分階層にかかわらず丁寧に遇することができることばであることが明らかである。王力（1985：148）では、「卒」は東周時代にも大夫だけでなく諸侯にも使われたりすることがあるが、唐代になるとその身分制約がいっそうゆるくなったと指摘しているが、この調査では、漢代において「卒」がすでに身分に直結する絶対敬語の色合いが薄れ丁寧な異形として一般化する傾向がはっきりしていたことが分

かる。

「卒」と「薨」の使用対象の身分が重なる現象はいったい何を意味するのか、それが同一人物に使われたのか、それとも人によってあるいは細かい身分条件によって使い分けられていたのか、これらの問題を検証するために、「卒」と「薨」が使われた周朝の 14 カ国の君とその死亡年をすべて調べてみる。表 6 はその調査結果を示すものである。表中、「卒」しか使われていない国は省略する。下に直線が付いた者には「卒」と「薨」が両方使われ、波線が付いた者には「薨」だけが使われ、残り全員は「卒」だけが使われた者である。括弧内は没年、(?) は世代関係は分かるが、具体的な没年が不詳であることを意味する。表 6 の調査で次のようなことが判明した。

①「薨」と「卒」が同一人物に重複して使われる現象がはっきり確認された。「薨」と「卒」は対象の身分がダブるだけではなく、「薨」が使われた国君 46 人中 44 人に対して「卒」も使われている。そして個々の表現スタイルや文脈条件などを見ると、その使い分けを動機づけるような社会的または修辭的特徴が見られない。たとえば、

燕王武公の死について、

「十九（年）武公薨」『第 14 卷 十二諸侯年表』

「武公十九年卒，子恵公立」『第 34 卷 燕召公世家』

魏安釐王の死について、

表6 「卒」「薨」使用の国君リスト

時代 国	西周 (前1066—前771)	東周(前770—前221)	
		春秋(前770—前476)	戦国(前475—前221)
呉国	太伯(?) 仲雍(?) 季簡(?) 叔達(?) 周章(?) 熊遂(?) 柯相(?) 孤鳩夷(?) 余橋疑吾(?) 柯慮(?) 周繇(?) 屈羽(?) 夷吾(?)	禽処(?) 轉(?) 顔高(?) 句卑(?) 去齊(?) 寿夢(前561) 諸樊(前548) 余祭(前531) 余昧(前526)	
曹国	曹叔(?) 太伯(?) 仲君(?) 宮伯(?) 孝伯(?) 夷伯(前835) 戴伯(前796)	惠伯(前760) 繆公(前757) 桓公(前702) 莊公(前671) 釐公(前662) 昭公(?) 共公(前618) 文公(前595) 成公(前555) 武公(前528) 平公(前524) 靖公(前502) 宣公(前578)	
晋国	靖侯(前841) 釐侯(前823) 獻侯(前812) 繆侯(前785)	文侯(前746) 鄂侯(前718) 武公(前677) 獻公(前651) 惠公(前637) 文公(前628) 襄公(前621) 成公(前600) 景公(前581) 悼公(前558) 平公(前532) 昭公(前526) 頃公(前512)	定公(前475) 哀公(前452) 烈公(前389) 孝公(前377)
鄭国	鄭伯(?)	武公(前744) 莊公(前701) 厲公(?) 文公(前628) 襄公(前586) 悼公(前585) 成公(前571) 釐公(前566) 簡公(前530) 定公(前517) 獻公(前501)	声公(前464) 共公(前427)
宋国	微子開(?) 微仲(?) 公稽(?) 丁公申(?) 湣公(?) 肋公(?) 釐公(前831) 惠公(前800) 哀公(前800)	戴公(前766) 武公(前748) 宣公(前729) 繆公(前720) 莊公(前669) 桓公(前692) 襄公(前637) 成公(前620) 文公(前589) 共公(前576) 平公(前532) 元公(前517) 景公(前452) 昭公(前404)	悼公(前396) 休公(前373) 辟公(前370)
蔡国	仲(?) 伯荒(?) 宮侯(?) 肋侯(?) 武侯(?) 夷侯(?)	釐侯(前762) 共侯(前760) 戴侯(前750) 宣侯(前715) 桓侯(前695) 繆侯(前644) 莊侯(前612) 平侯(前522) 悼侯(前519)	成侯(前472) 声侯(前457) 元侯(前451)
燕国	召公(?) 惠侯(前827) 釐侯(前791)	頃侯(前767) 哀侯(前765) 鄭侯(前729) 繆侯(前711) 宣侯(前698) 桓侯(前691) 莊公(前658) 襄公(前618) 桓公(前602) 宣公(前587) 昭公(前574) 武公(前555) 文公(前549) 釐公(前545) 平公(前505) 簡公(前493)	獻公(前465) 孝公(前450) 成公(前434) 湣公(前403) 釐公(前373) 易王(前321) 昭王(前279) 惠王(前272) 悼公(前259) 武成王(前258) 孝王(前255) 共公(前254)
魯国	伯禽(?) 考公(?) 煬公(?) 魏公(?) 肋公(?) 獻公(?) 真公(前826)	孝公(前769) 惠公(前723) 莊公(前662) 釐公(前627) 喜公(前627) 文公(前609) 宣公(前591) 成公(前573) 襄公(前542) 昭公(前510) 定公(前495)	哀公(前468) 悼公(前429) 元公(前470) 繆公(前375) 共公(前355) 康公(前344) 景公(前315) 平公(前295)
衛国	康叔(?) 康伯(?) 考伯(?) 嗣伯(?) 庫伯(?) 靖伯(?) 貞伯(?) 頃侯(?) 釐侯(前813)	武公(前758) 莊公(前735) 宣公(前700) 惠公(前669) 戴公(前659) 成公(前600) 繆公(前589) 定公(前577) 獻公(前544) 襄公(前585) 釐公(前493)	出公(前468) 悼公(前451) 敬公(前432) 慎公(前373) 声公(前362) 成侯(前333) 平侯(前325) 嗣君(前283) 元君(前230)
斉国	太公(?) 丁公(?) 乙公(?) 癸公(?) 獻公(?) 武公(前825) 文公(前804) 成公(前795)	莊公(前731) 釐公(前697) 襄王(前686) 桓公(前643) 孝公(前633) 昭公(前614) 惠公(前599) 頃公(前582) 釐公(前554) 景公(前490)	平公(前456) 宣公(前405) 侯太公(前383) 康公(前379) 威王(前320) 宣王(前301)
楚国	粥熊子(?) 熊渠(?) 熊肇紅(?) 熊勇(前838) 熊嚴(前828) 熊霜(前822) 熊徇(前800) 熊罾(前791)	熊儀(前764) 熊坎(前758) 武王(前690) 文王(前677) 繆王(前614) 莊王(前590) 共王(前560) 康王(前545) 平王(前516) 昭王(前489)	惠王(前432) 簡王(前408) 宣王(前340) 懷王(前296) 威王(前329) 頃襄王(前263) 考烈王(前238)
陳国	胡公(?) 申公(?) 相公(?) 孝公(?) 慎公(?) 幽公(前832) 釐公(前796) 武公(前781) 夷公(前778)	文公(前745) 桓公(前707) 利公(前700) 莊公(前693) 宣公(前648) 繆公(前632) 共公(前614) 成公(前569) 哀公(前534) 惠公(前506) 懷公(前502)	
魏国			文侯(前396) 武侯(前370) 惠王(前319) 襄王(前319) 哀王(前296) 昭王(前277) 安釐王(前243) 景湣王(228)
秦国	秦侯(?) 公伯(?)	襄公(前766) 文公(前716) 寧公(前704) 武公(前678) 德公(前676) 宣公(前664) 繆公(前621) 成公(前606) 康公(前609) 共公(前604) 桓公(前576) 景公(前537) 哀公(前501) 惠公(前491) 悼公(前477)	厲共公(前443) 簡公(前425) 釐公(前415) 獻公(前362) 孝公(前338) 惠王(前311) 武王(前307) 昭王(前251) 孝文王(前250) 莊襄王(前247)
計	86人 (うち1人)	153人 (うち1人, 36人)	72人 (うち1人, 8人)

表7 「死」の社会的階層分布

計	皇帝層		皇族層				諸侯王層		王族層				大臣層		仕官層				庶民層	
352人	4 (1.1%)		14 (3.9%)				73 (20.7%)		27 (7.7%)				85 (24.1%)		119 (33.8%)				30 (8.5%)	
内訳	帝	皇帝	皇太后	皇后	妃	太公子	国君	諸侯王	太后	王后	妃	太公子	酋長	大臣	侯	官吏	領袖	貴族	学者	
	3	1	1	1	4	8	44	29	3	3	1	20	1	42	42	82	3	17	17	

表8 「死」の庶民層の内訳

内訳	遊俠	勇士	医師	仕女	大夫以下の親族	その他
30人	3	4	2	2	14	5

「其歳，魏安釐王亦薨」『第77巻 魏公子列傳』

「三十四年，安釐王卒」『第44巻 魏世家』

「薨」と「卒」は，ある程度任意に選択され，両者の間に一種の自由変異（free variation）の現象が発生した可能性が高い．この問題について次節でさらに議論する．

②「卒」が周王朝全体に分布しているのに対して，「薨」はおもに東周の春秋時代以降に分布している姿がはっきり見て取れる．「薨」が使われたもっとも古い人物は西周末期の宋恵公（前800）で，没年不詳の西周前・中期の者には「薨」はまったく使われていない．表6により「薨」の運用には対象者の身分要素だけでなく，時代の新旧要素なども大きく関与したことが一層明らかになった．

5.4 「死」

表7では「死」がすべての階層に分布している現象が観察される．「死」と他の異形「崩，薨，卒」との間に単純に身分階級だけで使い分けられたわけではないことがこの調査で分かった．「死」が広範囲に分布していることについて次のようないくつかの要因が考えられる．

①『礼記』の「士曰不禄」にしたがえば，「仕官層」は「不禄」が使われたはずの領域である．しかし，表7の調査結果を見ると「仕官層」には「死」がもっとも多く使われた領域（119人33.8%）となっている．この現象について次の2つの視点から解釈することができる．

まず，通時的に見て，『礼記』は『礼経』（孔子編，

現在散逸）を解説するために書かれた一面があるので，その記述「天子死曰崩，諸侯曰薨，大夫曰卒，士曰不禄，庶人曰死」は周王朝時代の言語習慣に基づいた可能性がある．かつて周王朝においてこのような身分構造と言語表現との対応関係が存在していたとしたら，司馬遷が『史記』を執筆した漢王朝時代になると，その対応関係が大きく崩れ，各異形の間に領域再分配が行なわれ，前節で見たように，「薨」と「卒」の間に対象の時代による差や自由変異が現われると同時に，「死」と「不禄」の間にも領域争いが発生し，その結果，「不禄」が完敗し，「死」が「士」の身分にまで進出しその領域を併合したと見ることができる．「不禄」が「死」に取って代わられた原因について，周王朝が諸侯国の連合体であり，各諸侯国の中で士と庶民の身分がはっきり区別される必要があったが，巨大な統一国家漢王朝の誕生により身分構造が大きく変わり下級の官吏「士」と庶民の区別が目立たなくなり，「死亡」の異形によって表現し分ける必要性が薄れたと解釈することができる．『唐書・百官志』において官吏の死について「二品以上称薨，五品以上称卒，自六品達於庶人称死」（二品以上の官吏は「薨」，五品以上は「卒」，六品以下から庶民までは「死」と称する）（王1985：148）と規定していることから，異形「不禄」の退廃がその後定着したと見ることもできる．

そして，共時的に見て，言語規範は，Wardhaugh, R (1992：30) が指摘したように，「その言語の使用者が観察された行動と実際に一致するものという

よりはむしろ、かれらがあこがれることを要請されているものなのである」(和訳本: 41)。『礼記』が示した身分と異形の対応関係についても、それは古代中国語の標準変種「雅言」の社会的規範を示したもので、儒教倫理観に基づく一種の理想化された言語運用モデルと見ることができる。「仕官層」に「死」が使われるという今回の調査結果は、当時の言語運用の理想モデルと言語運用の現実との間のずれを示したものと解釈することができる。

②次に、「崩」が使われるはずの「皇帝層」に「死」が使われた要因について考えよう。「死」が使われた皇帝層の人物は、夏王朝では「桀」、商王朝では「武乙、紂」、秦王朝では「秦始皇帝」の4人である。「桀」と「武乙、紂」には「死」しか使われていないが、秦始皇帝には「崩」も使われている。この4人は歴史上暴君と伝えられた人物であるが、『史記』では「桀、武乙、紂」については民衆を残害し天神を冒瀆する邪悪な人間として描かれているが、始皇帝についてはその凶暴な側面と歴史的功績の両面がつづられている。秦始皇帝に対する「死」の使用は2回だけである。1回は隕石にきざまれたことば「始皇帝死而分地」、もう1回はある道士の予言のことば「今主龍死」であるが、2回とも『第6巻 秦始皇本紀』の中で始皇帝在位当時の人びとが彼の死をのろったことばを引用したものである。一方、始皇帝に対する「崩」の使用は13回現れ、いずれも「始皇帝五十年而崩」(『第5巻 秦本紀』)、「始皇帝至沙丘崩」(『第88巻 蒙恬列伝』)などのように、その死の事実を述べることばである。この4人以外の皇帝層の人物に対して「死」がまったく使われていないことを考えると、「桀、武乙、紂」に対する「死」の使用は明らかに司馬遷の評価的、待遇的態度に基づいたもので、秦始皇帝に対する「死」の使用は、他者のことばを引用するという間接的なものではあるが、ある程度司馬遷が当時の人びとが始皇帝に対する憎悪の態度を異形「死」が持つ待遇の効果を通して反映させたと見ることができる。

唐代の孔穎達(7世紀)は、『礼記正義』において『礼記』の記述「天子死曰崩…庶人曰死」について、「諸侯卑死不得効崩之形」(諸侯は天子より身分

が卑しいので天子と同じように「崩」を使うことはできない)、「大夫是有徳之位…故曰卒也」(大夫は徳がある立場なので…「卒」と言う)、「庶人極賤…故曰死」(庶民はもっとも卑賤な身分なので…「死」と言う)(上海古籍出版社1990: 98)などと疏注し、異形の使い分けを対象者の尊卑・貴賤や徳の有無などの倫理性に関連づけて解釈している。しかし、「桀、武乙、紂」などのように高い身分を有しながら徳を備わず民に尊ばれない者がいれば、身分と倫理的評価との間に一種の矛盾が生じてくる。『史記』の運用実態を見ると、このような場合、司馬遷は身分という単一要素による機械的な適用をせず、その人が身分相応の徳や民心を得ていたかどうかという倫理評価の基準を優先させたことが明らかである。このような言語運用法は当時一般の、あるいは司馬遷自身の歴史観、価値観に影響されたもので、孔子がかつて魯国の歴史を編纂した時に使った「春秋筆法」と言われる対人評価法にあい通じるものである。

③「死」が幅広く分布しているもう1つの原因は、「死」は3.2の意味分析で指摘したように38の異形の中で唯一、死を派生的な意味としてではなく、1次的な意味として表す表現であり、「庶人」という身分属性を指標するだけでなく、〈死亡〉変項の基本形であることと深く関係している。「死」が暴君に対して使われる事実と、「天子死曰崩」の中の「死」の使い方のように不特定の人物や動物などに対して使われるという事実とを合わせて考えると、「死」が各異形の中でもっとも基本的な表現で、異形選択の社会的身分条件などが機能しない場合には「死」という基本形にもどると言う言語運用上のダイナミックな一面が見えてくる。

④「死」が幅広く分布している4つ目の要因は「死」と「卒」、「薨」の間に起きた自由変異という現象にある。自由変異とは、ある目的によって使い分けられず、特別な意義を持たない無規則な変異現象のことを言う(Wardhaugh 1986: 138, Spolsky, B 1998: 122)。つまり、同一文脈において同一言語変項に属する複数の異形がどちらも可能な選択肢として現れうる場合の変異現象のことを言う。その現

表9 「死」と「薨」「卒」の自由変異

	「死」と「卒」	「死」と「薨」	「死」と「薨」と「卒」
春秋	秦襄公（前766）、文公（前716）、恵王（前491）、武公（前307）／ 齊献公（前771前）、莊公（前731）、桓公（前643）、景公（前490）／ 陳懐公（前502）		
戦国	燕昭王（前279）／楚平王（前516）、懐王（前296）、晋哀公（前452）／ 宋襄公（前637）／呉王諸樊（前548）、余祭（前526）		秦莊襄王（前247）
漢	膠東康王（前121）	梁懷王（前168）	

象を確かめるために、「死」と「薨」「卒」が重なって使われた「諸侯王層」の人物とその死亡年を調べてみる。表9はその結果である。

二重使用の現象は「卒」と「死」の間にもっとも顕著に見られる。このような変異に規則性があるかどうかをみるために、同一人物に複数異形が使われた場合の文脈条件を見てみよう。以下は「薨」「卒」「死」が使われた秦莊襄王（秦始皇帝の父）についての記述例（全4例）である。

- ・莊襄王即位三年、薨、太子政為王。『第85巻 呂不韋列伝』
- ・十六年、秦莊襄王卒、秦王趙政立。『第40巻 楚世家』
- ・五月丙午、莊襄王卒、子政立。『第5巻 秦本紀』
- ・年十三歳、莊襄王死、政代立為秦王。『第6巻 秦始皇本紀』

以上の用例をみると、「薨」「卒」「死」は秦莊襄王という同一人物に対してほとんどまったく同じ文脈の中で使われていることが分かる。この変異現象について、社会的または文体的、修辭的に解釈することはほとんど無理である。前節表6で見られる「卒」と「薨」の二重使用を含めて、〈死亡〉の各異形の間に真の意味での自由変異が存在することは明らかである。もちろん、自由変異とは言っても、完全に無制限、無条件に自由というわけではない。ここではさらに自由変異を「体系的、組織的なもの」と「個別的、偶発的なもの」とに分けることができる。表6に見られる「薨」と「卒」の間の自由変異と、表9に見られる「死」と「卒」の間の自由変異はいずれも東周時代（前770～前221）の国君に集中して現われている。これは司馬遷の時代において、「薨」と「卒」の社会的意味や指示対象領域があいまいになり、5、6百年前の人物に対する司馬遷の

対人評価の意識がゆれた結果と見ることができる。一方、秦の莊襄王や漢の膠東康王、梁懷王のように限られた指示対象にのみ現われた自由変異現象は組織的なものよりも個別的、偶発的なものと見ることができる。

『礼記』では「庶人曰死」と言っているが、『史記』の中で「死」が使用された庶民層の数はそれほど多くない。これは、『史記』の中で一般庶民の死についての話題そのものが少ないことによるものである。表8を見ると分かるように、実際「庶民層」の中には、「遊俠」「勇士」「医師」など比較的地位や人気のある者が大半を占め、まったく無名な一般庶民はほとんど現れていない。しかし、「死」が『史記』の中で動物に対しても使われ、4つの異形の中で評価値がもっとも低い表現であるということから、それが当時一般庶民に対しても使われていたことは容易に想像できる。

5.5 その他の異形

〈死亡〉変項の中で、以上考察した4つの異形「崩、薨、卒、死」以外の異形と社会的身分との関係をまとめると、表10ようになる。表1ではすべての異形の中で、延べ使用数において4異形が圧倒的に多いが、表10では、使用対象人数においてもその他の異形は4異形（「卒」600人、「死」352人、「薨」148人、「崩」89人）に比べてはるかに少ない。そのため、ここで分析の視点をやや広げ別の角度から他の異形の運用上の特徴を探てみたい。ある人物の死について、確定の事実として記述する場合とその人の死を仮定して言う場合とが考えられる。そして、異形が地の文に使われた場合と会話文に使われた場合とを区別することができる。表10では、その他の34の異形と社会的階層との関係を

表 10 その他の異形の社会的階層分布

(▲仮定文, ●会話文)

特徴 異形	身分	皇帝層	皇族層	諸侯層	王族層	大臣層	仕官層	庶民層	特徴 異形	身分	皇帝層	皇族層	諸侯層	王族層	大臣層	仕官層	庶民層
終 (8人)		1		2		1	3	1	没齒 (1人)		1						
没 (5人)		1	1	1		1	1		切身 (1人)					1			
亡 (3人)				3					▲●万世 (1人)		1						
故 (5人)			4	1					棄損 (1人)						1		
夭 (3人)				2			1		●下席 (1人)		1						
歿 (1人)						1			▲●棄群臣 (1人)		1						
喪 (1人)				1					▲●填溝壑 (2人)						1	1	
債 (1人)						1			●天年終 (2人)								2
隕 (1人)				1					▲●捐館舍 (2人)						2		
實 (1人)		1							▲●捐賓客 (1人)				1				
殊 (1人)			1						▲●山陵崩 (1人)			1					
▲●百歳 (2人)		1	1						▲●不立朝 (1人)				1				
没世 (2人)				1			1		▲●宮車晏駕 (4人)		3		1				
物故 (1人)						1			▲●千秋万歳 (1人)		1						
寿終 (2人)						2			登仙于天 (1人)		1						
▲ 万歳 (2人)		2							●天年下世 (1人)								1
▲ 千秋 (1人)		1							●天崩地坼 (1人)		1						

示すと同時に、「もし亡くなれば」という假定表現としてのみ使われた異形には▲印を、会話文にのみ使われた異形には●印をそれぞれつける。

表10の調査により、〈死亡〉異形の中で2字以上の熟語や句表現のほとんどが会話文にのみ現れ、しかも假定表現としてのみ使われたことが明らかである。

その他の異形が使われた対象者の数が少ないため、異形と身分の関連性についてははっきりした傾向として語ることがむずかしいが、ここでは注目すべき点を2つあげておきたい。

①『史記』の『第79巻 範雎蔡澤列伝』の中で、戦国時代の秦国の官吏王稽が秦の大臣（丞相）範雎に対して次のようなことを言った。

「事有不可知者三、有不可奈何者亦三。宮車一日晏駕、是事之不可知者一也。君卒然捐館舍、是事之不可知者二也。使臣卒然填溝壑、是事之不可知者三也」(事物には知ることの出来ない事柄が三つあり、どうすることも出来ない事柄もまた三つあります。天子がある日崩御される(原意：御車がある日突然遅れて越される)かもしれないこと、これが知ることの出来ない事柄の一です。あなたが急に亡くなられ

る(原意：あなたが急に館舎をすてる)かもしれないこと、これが知ることの出来ない事柄の二です。私が突然息はてる(原意：溝を埋める)かもしれないこと、これが知ることの出来ない事柄の三です。) (明治書院本『史記・列伝2』通釈：183,原意は筆者による)

この発話の中で指示対象の身分階級(国君、大臣、官吏(=話者自身))と異形[宮車晏駕、捐館舍、填溝壑]がはっきり対応している。これは当時の会話スタイルにおいても異形が使い分けられ、その社会的意味の違いがはっきり認識されていたことを示している。

②[百歳、千秋、万歳、万世、千秋万歳]の中で、[百歳]は漢の皇太后(呂太后)(3回)と漢の皇帝(景帝)(1回)が、[千秋](1回)と[千秋万歳](1回)は漢景帝がそれぞれ自分の死について假定表現として使ったが、[万世](1回)と[万歳](2回)は漢の諸侯王が皇帝の死を假定する時に使った。それを見ると、自分の死に言及する時、皇帝は[百歳][千秋][万歳]のどちらも使うが、太后は[百歳]だけを使い、他者が皇帝の死に言及する時には[万世][万歳]だけを使うことが分かり、数詞[百

表 11 各階層における異形使用の分布

階層	総人数	崩	薨	卒	死	その他
皇帝層	104人	83 (79.8%)	0	0	4 (3.9%)	17 (16.3%)
皇族層	36人	6 (16.7%)	3 (8.3%)	8 (22.2%)	14 (38.9%)	5 (13.9%)
諸侯王層	621人	0	91 (14.7%)	443 (71.3%)	73 (11.8%)	14 (2.3%)
王族層	49人	0	9 (18.4%)	13 (26.5%)	27 (55.1%)	0
大臣層	263人	0	45 (17.1%)	122 (46.4%)	85 (32.3%)	11 (4.2%)
仕官層	139人	0	0	12 (8.6%)	119 (85.6%)	8 (5.8%)
庶民層	36人	0	0	2 (8.6%)	30 (83.3%)	4 (11.1%)

〔歳〕, 〔千 (秋)〕, 〔万 (世, 歳)〕の間に微妙な待遇差が感じられる。

その他の異形の調査結果を通して、〈死亡〉変項が持つ豊かな表現バリエーションの存在が明らかになると同時に、〔崩〕〔薨〕などのような語義的に定着したいわゆる死んだメタファー以外に、〔百歳〕〔宮車晏駕〕などのような死の意味が明示されない、生きたメタファーの存在が確認され、2千年前の口語表現の興味深い一面をかいま見ることができた。残念ながら、データが分析に耐え得るほど十分な量が出ていないので、表10についてこれ以上議論することを控えたい。

6. まとめ

これまでは〈死亡〉の各異形を中心に、それぞれ使われた対象者の社会的階層と人数および割合について分析してきたが、最後に、各身分を中心に、各異形が使われた人数とその割合を表11のように示す。各階層にもっとも多く使われた異形は網かけで示す。

表11の調査結果と『史記』の運用実態に関するこれまでの考察を通して、『礼記』の記述内容、すなわち本論の作業仮説に対する検証結果を以下のようにとまとめることができる。

(1) 『史記』において、『礼記』が規定した5つの〈死亡〉異形と身分との間に次のような関係が確認された。

「天子死曰崩」について、〔崩〕は、「皇帝層」(＝天子)と「皇族層」の中の「太上皇、皇太后」に対して使われている。そして、「皇帝層」であっても

倫理上欠陥があると判断された者には〔崩〕の使用が回避されている。したがって、「皇帝層」は、異形〔崩〕が選択されるもっとも重要な条件ではあるが、必要十分条件ではないことが分かる。しかし、〔崩〕の対象者の中で「皇帝層」が占める割合は93.3% (表2)に、「皇帝層」の中で〔崩〕が使われる割合は79.8% (表11)にそれぞれのぼり、『史記』の運用実態と『礼記』の規範は、100%ではないが、きわめて高い確率で一致していることが検証された。

「諸侯曰薨」について、〔薨〕は、表4が示したようにおもに「諸侯王層」(＝諸侯)と「大臣層」の間に使われ、「仕官層」以下にはまったく使われていない。この意味で「天子」に次ぐ高い身分の者に使われるという『礼記』の位置づけが支持されることになる。しかし、表11で「諸侯王層」と「大臣層」に使われた異形の中で、〔薨〕が現われる割合はそれぞれ14.7%と17.1%しかなく、〔薨〕が「諸侯王層」にもっとも多く使われた異形ではないことが明らかとなった。そして、〔薨〕は身分制限だけでなく、表6が示すように、おもに紀元前7世紀以後の人物に使われるという時代的制約も受けている。

「大夫曰卒」について、〔卒〕は、「皇帝層」以外のすべての身分に使われたが、表11では〔卒〕が「諸侯王層」に使われる割合は71.3%、「大臣層」(＝大夫)に使われる割合は46.4%なので、むしろ「大夫」より上の階層「諸侯王層」を中心に分布していることが分かる。しかし、〔卒〕はその使用範囲が『礼記』の規定よりずっと幅広く、身分に直結する絶対敬語的な要素よりも、5.3の孔子の例で見

たように、〈死亡〉の丁寧な異形として一般化する傾向が見られる。

「士曰不禄」について、[不禄]は「仕官層」(=士)のみならず他の身分の者に対してもまったく使われていない。その原因について5.4で説明したが、この点において『礼記』の規定した身分と異形の対応関係はまったく検証されなかった。

「庶人曰死」について、[死]はすべての身分に分布しているので、その使用は身分という単一条件によるものではないことが明らかである。しかし、表11で[死]は『礼記』において[不禄]が使われるとされる「仕官層」の中では85.6%、「庶民層」(=庶人)の中では83.3%という高い割合で現われているので、身分階層の中でもっとも社会的地位の低い者に使われるという意味で、『礼記』の位置づけがおおた支持されたと見ることができる。

(2) 『礼記』が規定した〈死亡〉の異形と身分の対応関係は、成立するかしないかという二者択一の関係ではなく、100%~0%の間に分布する確率的な関係であることが明らかになった。

(3) 異形選択に関する「社会的変異」と「自由変異」の違いがはっきり浮かび上がってきた。各異形の運用は、常に[崩]と[死]の間のようにすべて鮮明な境界を持ち、社会的関数に基づいて説明できるわけではなく、時には[薨]と[卒]、[卒]と[死]の間のように不安定領域が存在し、自由変異が発生したりする。そして、社会的変異には身分階層、倫理性、時代などの関数要素が深くかかわり、自由変異の中には組織的なものと偶発的なものが存在することが明らかになった。

(4) 本論は、『礼記』に記された〈死亡〉の異形と社会的階層との対応関係について、『史記』言語運用の実態を通して検証してきたが、われわれは、かつて考証学者たちがしたように他のテキストに基づいて『礼記』記述の真偽、正誤について議論したりはしない。なぜなら、規範はある種の理想像であり、ことばの運用が乱れた現実を正そうという認識で作られたもので、最初から現実と一致していることを主張するものではなかったからである。しかし、われわれは古代言語の規範を規範として、実態を实

態として正確に把握することは必要である。今回、われわれは、社会言語学の視点を導入することにより、これまで闇に包まれた古代中国語の言語運用の一面を明らかにし、ことばの実態と規範、現実と理想の違いを実証的に示すことができた。

最後に、『史記』の版本が雑多で、各版本の間に多くの違いが見られる。しかし、筆者が参考文献にある複数版本を確認した限りでは、各版本の間に内容欠落による統計上の相違はあるものの、本研究の結論をくつがえすほどの差がないことを、ここに一言付して論を締めたいと思う。

[付記：本研究は、2002年度神奈川大学言語研究センター研究奨励助成「最先端言語理論の応用研究—中国歴史言語研究の新視点」の成果の一部としてまとめたものである。]

参考文献：(中日文献は50音順)

- 安平秋 1998『『史記』版本述要』北京大学百年国文学粹・語言文献巻』北京大学出版社
 王力 1985『古代漢語(一)』中華書局
 管錫華 2000『史記單音詞研究』巴蜀書社
 韓兆琦 1996『史記通論』廣西師範大學出版社
 吉春 1989『司馬遷年譜新編』三秦出版社
 孔穎達(疏) 7世紀『礼記正義』上海古籍出版社 1990
 顧日国 1992「礼貌、語用與文化」『外語教學與研究』北京外國語學院語言研究所 10-17
 左丘明 1972『春秋左氏伝』明治書院(鎌田正編注)
 司馬遷 前1世紀『史記』中華書局 1997(底本：金陵書局刊行『史記集解索隱正義合刻本』)
 司馬遷 前1世紀『史記』汲古書院 1996(底本：南宋建安黃善夫刊本影印本)
 司馬遷 前1世紀『史記』明治書院 1973(吉田賢抗、水沢利忠編 底本：『史記会注考証』『増訂史記評林』)
 朱東潤 1996『史記考索』華東師範大學
 沈錫倫 1995「表現民族文化的語言形式—文化語言學初探」『文化語言學中國潮』邵敬敏主編 語文出版社 59-67
 倉修良 1991『史記辭典』山東教育出版社
 曹文柱 1996『中国社会通史—秦漢魏晉南北朝』山西教育出版社
 孫希旦(撰) 18世紀『礼記集解』中華書局 1989
 陳建民 1989『語言文化社會新探』上海教育出版社

- 鄭之洪 1997『史記文献研究』巴蜀書社
- 班固 1世紀『漢書』中華書局 1997
- 彭国躍 1999「文革中における中国語絶対敬語の復活とその社会的背景」『人文研究』(137) 神奈川大学人文学会 1-20
- 彭国躍 2000『近代中国語の敬語システム—「陰陽」文化認知モデル』白帝社
- 彭国躍 2001「古代中国の言語禁則とその社会的コンテクスト—『礼記』言語規範の研究」『神奈川大学言語研究』(23)
- 神奈川大学言語研究センター 135-154
- 彭国躍 2002「古代中国語における呼称の社会的変異—『礼記』言語規範の研究」『社会言語科学』(5-1) 社会言語科学会 5-20
- 宮崎市定 1996『史記を語る』岩波書店
- Denis Twitchett and Michael Loewe 1986 The Cambridge History of China Volume1-The Ch'in and Han Empires 221 B.C.-A.D. 220 Cambridge University Press (楊品泉他訳『劍橋中国秦漢史』中国社会科学出版社 1992)
- Harald Weinrich 1976 Sprache in Texten. Stuttgart, Klett Verlag (協阪豊他訳『言語とテキスト』紀伊国屋書店 1984)
- Spolsky, B. 1998 Sociolinguistics. Oxford University Press.
- Wardhaugh, R. 1992 An Introduction to Sociolinguistics. Oxford: Basil Blackwell. (田部滋, 本名信行訳『社会言語学』リーベル出版 1994)

(2002年7月19日受付)

(2003年1月24日掲載決定)